

## 序

奈良文化財研究所と大韓民国国立文化財研究所との共同研究がはじまって10年が過ぎました。この間、成果を提示しあう研究交流にとどまらず、実際の発掘現場に研究者を互いに参加させ、データを構築する基礎的な段階からの交流も深めてきました。これらは、日韓双方の研究状況や研究手法の共通性と相違を具体的に認識できる場となっており、今後の両国の研究の進展に大きな意義を持つものと思います。また、これらを通じてとくに若手研究者が大きな刺激を受け合っていることも重要です。

ところで、2005年からは、テーマを「日本の古代都城並びに韓国古代王京の形成と発展過程に関する共同研究」として進めています。これに関連する具体的な成果を日韓研究者の個別論文集の形でまとめることとしました。その最初の成果は、『日韓文化財論集Ⅰ』として2007年に刊行しました。このたび刊行する論集は、これに続くもので、両研究所あわせて17名の中堅、若手研究者が論考を寄せました。考古、建築、歴史の多分野の論考が集まりました。両研究所の共同研究は、都城・王京の研究テーマを核に少しずつ広がっており、建築、歴史、考古など各分野それぞれに独自のテーマをもった研究も進展し始めています。今論集をご覧いただければ、その傾向をご理解いただけたと思います。

両研究所の共同研究は、上記分野にとどまらず、庭園、遺跡整備、復原、そして保存科学などを加えた多岐にわたる分野にまたがっています。今後ともこれら多角的な共同研究の成果が、こうした論集の形で結実することを期待するとともに、こうしたことを通じて文化財保存への両国の取り組みが互いに進展することを祈念するものです。

2010年11月

独立行政法人国立文化財機構  
奈良文化財研究所長  
田辺征夫

## 발 간 사

우리연구소와 일본 나라문화재연구소는 「한국 고대왕경 및 일본 고대도성의 형성과 발전에 대한공동연구」라는 주제로 2005년부터 다양한 사업을 추진하여 왔습니다. 본 연구는 이제까지의 단편적인 인적교류를 뛰어넘어 ‘고대도성’이란 분명한 주제를 바탕으로 이루어졌다는 데에 그 의미가 있다고 할 수 있습니다. 특히 연구의 성과물인 『한일문화재논집』은 공동연구를 통해 얻어진 한-일의 도성제와 도성에 포함되는 다양한 연구주제를 다루고 있어 학술적 가치가 높다고 할 수 있습니다.

이번에 발간하는 『한일문화재논집Ⅱ』는 지난 2007년에 발간된 『한일문화재논집Ⅰ』에 이은한·일 공동연구의 성과물로서 양국 두 기관 총 17명의 연구자가 작성한 논문을 엮은 것입니다. 논문집은 고대도성의 형성과 발전에 대한 다양한 시각의 연구와 유적의 보존·정비에 관한 주제로 이루어져있어 내용면에서도 문화재를 보호하는 양국 두 기관의 역할에 걸맞다고 생각됩니다.

이러한 공동연구는 한-일 양 연구소의 학술적 잠재력을 증진시키기 위한 촉매제로서 앞으로 지속적으로 발전되어 나아가야 할 것입니다. 또한 우리연구소는 일본 나라문화재연구소와 지속적인 공동연구의 추진을 통해 연구 범위의 확대와 질적 수준의 향상을 이루어야 할 것입니다. 바쁜 업무에도 불구하고 연구논문을 제출한 양 기관의 연구원들에게 감사의 말씀을 전합니다.

2010년 12월

국립문화재연구소장  
김 영 원

## 発刊の辞

私たち国立文化財研究所と日本の奈良文化財研究所は、「韓国古代王京並びに日本の古代都城の形成と発展過程に関する共同研究」という主題で、2005年から多様な事業を推進して来ました。本研究は、それまでの断片的な人的交流を越え、「古代都城」という明確な主題のもとに行われたという点にその意義があると言えます。特に研究の成果物である『日韓文化財論集』は、共同研究を通じて得られた日韓の都城制と、都城に含まれる多様な研究主題を扱っており、学術的価値が高いものと言えるでしょう。

今回刊行する『日韓文化財論集Ⅱ』は、2007年に刊行された『日韓文化財論集Ⅰ』に続く日韓共同研究の成果物であり、両国の二機関から合計17名の研究者が作成した論文を盛り込んだものです。論文集は、古代都城の形成と発展についての多様な視角による研究と、遺跡の保存・整備に関する主題とで構成されており、内容の面でも文化財を保護する両国の二機関の役割にふさわしいものであると考えます。

このような共同研究は、日韓両研究所の学術的潜在力を高めるための触媒として、今後持続的に発展させていくべきものでありましょう。また私たち国立文化財研究所は、奈良文化財研究所との持続的な共同研究の推進を通じて、研究範囲の拡大と質的水準の向上を成し遂げなくてはならないでしょう。多忙な業務にも関わらず、研究論文を提出してくださった両機関の研究者に、感謝の言葉を捧げます。

2010年12月

大韓民国国立文化財研究所長  
金 英 媛